第３７号　平成２８年３月１８日

# 研究だより

香川大学教育学部 附属坂出小学校

## 第98回教育研究発表会を終えて

### 対話を通した「思考力」の育成（２年次）
－「育てるカウンセリング」を生かして，個々の考えを広げ深める授業づくり－

### ごあいさつ

校　長　若井（わかい）　健司（けんじ）
副校長　樽本（たるもと）　導和（みちかず）

陽春の候，皆様におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて，本校では平成28年１月28日，29日の両日にわたり，第98回教育研究発表会を開催いたしました。県内外から延べ約1,450名の参会者をお迎えし，盛会裏に終了することができました。

現在，一人一人の教員が研究発表会での子どもの様相や参会者からいただいたご意見を振り返り，成果と課題を明らかにしています。そして，国の動向を踏まえ地域のモデルとなるような授業を常日頃から創っていこうと全教職員で決意を新たにしているところです。

懇切なるご指導ご助言をいただきました北海商科大学の大友秀人先生，文部科学省の水戸部修治先生，香川県教育委員会，各市町教育委員会，香川大学教育学部の先生方，また，運営にご協力くださいました保護者，ボランティア学生及び関係各位に対して，心より御礼申し上げます。

## 国語科　第3学年「ぼく・わたしのオリジナル詩集を作ろう　ー気持ちをことばにー」　片岡（かたおか） 亜貴子（あきこ）

『紙ひこうき』と『夕日がせなかをおしてくる』のうち，オリジナル詩集に入れたい方を選択して，その理由を伝え合うという学習を行いました。まず，子どもたちは心に響いたことばを自分の経験や知識とつないで，「紙ひこうきは甘えん坊みたいだな。」等と詩の中の景色や人物の気持ちを具体的に捉えていきました。そして，「夕日と僕らは仲よく会話をしているみたいだから，この詩を選ぶよ。」等のように，自分のことばで表現した詩のよさを伝え合いながら，それぞれの詩の読みを深めていきました。

前時に学習した「くり返し」や「オノマトペ」等の表現技法を色分けして示し，想像を広げる手がかりとしました。

諸感覚を使って「頭のテレビ」に景色の様子や人物の気持ち等を映し，ワークシートに書き込んでいきました。

グループ対話では，「ことば」と「態度」で反応することを意識しながら，その詩を選んだ理由を伝え合いました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・子どもたちは，互いの考えを認め合いながら対話をし，詩の読みを深めていくことができた。
・心に響いたことばに名札を貼らせ，同じことばを選んだ子どうしで対話をさせる方法もある。

## 国語科　第4学年「平和への思いをこめて音読しよう　～『世界一美しいぼくの村』～」　西岡（にしおか） 由都（よしくに）

物語の最後の一文，戦争で破壊された村の様子を想像し，音読のしかたを考えました。その際，関連する物語『ぼくの村にサーカスがきた』『世界一美しい村へ帰る』にある，「世界一美しい村は，今も，みんなの帰りを待っています。」等の叙述とつなげながら村の様子の想像を広げ深めていきました。それにより，絶望的な場面ではあるけれど，そこに未来への希望もあることに気付いた子どもたちは，国際交流員の方に物語を紹介する際，自分はどのように最後の一文を音読するのかを決めていきました。

「希望と絶望」を軸とした線上に，最後の一文とつないだ情景の叙述を位置づけ，小グループで考えを比べ合いました。

全体対話の前に，仮に自分とは異なる意見であっても，その考えに共感した友達の名前を紹介する時間をもちました。

自分がつないだ叙述が，「希望と絶望」の間のどこに位置づくのか，クラス全員が，名札と共に黒板に示していきました。

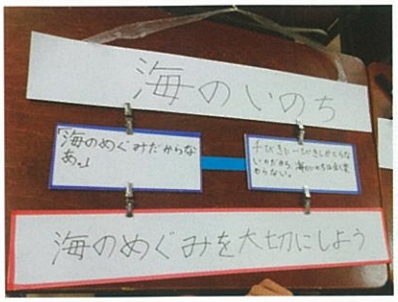
**授業討議でのご意見・ご指導**

・複数の物語をつなげて読むことで，子どもたちの読みと音読が深まっていった。
・物語を会話，行動，情景に分け思考を焦点化できたが，三つの関連づけも図っていく必要がある。

## 国語科

**第6学年「ポップを使って自分が選んだ物語を紹介しよう　―『海のいのち』―」**　尼子（あまこ）　智悠（ともひさ）

これまで，『海のいのち』や自分が選んだ物語からメッセージが伝わってくると感じた叙述をカードに記してきた子どもたち。本時は，その叙述から伝わってきたメッセージをポップに書くことを学習問題として設定しました。まず，これまでに書いたカードの中からメッセージが強く伝わってくると感じたものを選び，そこから伝わってくるメッセージを書きました。次に，自分が選んだ叙述とメッセージを紹介し合うことで，友達の考えと比べながら，自分の考えを深めていきました。




つり下げ型ポップを使用することで，個々がどの叙述を選び，どのようなメッセージを感じたのかを明らかにしました。

「不安だったけれど相手に話をしてよかった」という教師の体験を語ることで，話しやすい雰囲気をつくりました。

自分が捉えたメッセージを友達と伝え合い，メッセージを感じた叙述及びメッセージの共通点や差異点に気付きました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・つり下げ型ポップは，子どもの思考の流れの違いがよく分かる教材であった。
・ポップを完成させる前に対話を設定した方が，対話の必要感がより生まれたのではないか。

## 社会科

**第3学年「願いを叶える！道具が変える私たちの生活」**　藤本（ふじもと）　博文（ひろふみ）

ポンプと水がめが水道に変わることで，生活がどのように変わったのかを学習問題としました。問題を解決するために，ポンプと水がめが水道になることのよさに着目し，生活班でそのよさを伝え合いました。その中で，「道具が変わったら，水くみで家の外に出なくてもよくなって，生活は楽になった。」等と，利便性や効率性の面で生活が豊かになることを捉えていきました。その一方で，道具が変化することの問題点にも着目していきました。

水をポンプから水がめにためて使うまでの流れを，板書上で確認することで，家族の協力に気付けるようにしました。

「上手な話の聴き方」ができていることを称賛することで，相手の考えを受け入れて対話を進められるようにしました。

生活が楽に，より手間がかからなくなることを，ポンプと水がめから水道へと道具が変化したことと関係づけていきました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・発表に対する反応やうなずきがあり，安心して考えを話そうとする学級の雰囲気ができていた。
・事前に準備した水がめを使って，水くみ等の体験を充実させておくと，より思考が深まるだろう。

## 算数科　第2学年「10000までの数について調べよう」

白川　章弘

本実践では，「3200は100をいくつ集めた数」になるのか調べていきました。子どもたちは，位取り板を使い，100が10個で1000になることを基に「3200は100を32個集めた数」であることを説明し合う中で，数の相対的な大きさについて捉えていきました。その後，前時に扱った「8652」と「3200」とを比較しながら，二つの数の違いについて話し合わせたことで，「十と一の位が０のときは『100がいくつ』という表し方ができる。」と，数についての理解をより一層深めていくことができました。

位取り板に100のまとまりを置かせることで，3200は，100を32個集めた数であることを確かめられるようにしました。

理由を説明し合う中で，どちらの考えも，「100が10個で1000」を基にしていることに気付くことができました。

「聞き方の手引き」を参考に，友達の発表に対して疑問に思ったことを進んで質問する姿が見られました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・自分の考えを話したり，分からないことを質問したりすることのできる雰囲気づくりができていた。
・個々が考えた具体物の操作を基に，もっと子どもどうしがつながるような対話ができるとよい。

## 算数科　第5学年「式と表をつないで考えよう　－変わり方－」

清水　顕人

これまでに，「三角形の面積が底辺の長さに比例すること」「長方形の面積が横の長さに比例すること」を見つけてきた子どもたちは，本時の台形の面積も「下底の長さに比例するのではないか」と予想し，表をかきながら台形の面積の変わり方を調べていきました。そして，予想と違って比例の関係にならないことを知り，台形の面積の変わり方は三角形や長方形の時とどう違うのか，台形の面積が下底の長さに比例しないのはなぜかと，グループや全体で対話を深め，式の数値を図や表とつないで説明しました。

台形の面積の変わり方を表に表すことで，三角形や長方形の場合と比較しながら比例の関係ではないことを理解しました。

「新・エクササイズのルール」を示し，話すのが苦手な友達に配慮して自分たちで時間を決めて対話できるようにしました。

台形の面積が下底の長さに比例しないわけを，最初の赤い台形に着目して，式と図をつなぎながら説明していきました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・聴く姿勢が育っており，受容的な雰囲気の中で授業が進んでいたと感じた。
・最初から「台形の面積が下底の長さに比例しないのはなぜか」という視点で対話をさせてはどうか。

## 理　科　第5学年「物が溶けるふしぎ」

竹森　大介

前時に20℃，40℃と水の温度を変えてミョウバンの溶け方を調べている子どもたち。本時は「もっと温度を上げるとミョウバンの溶ける量はどうなるのだろう」という学習問題を設定しました。そして，水の量を変えて溶かしたときの実験や食塩を水に溶かしたときの実験を基にして，「２倍，３倍と増えるのではないかな。」「あまり変わらないのではないかな。」と各自の予想を立てました。実験後，各班の結果を全体のグラフに表すことで，どの班も溶ける量が大きく増えているという傾向をつかみました。

予想場面では，前時までの実験結果のグラフに透明シートを重ねて予想を書かせることで，考えを多様に表出させました。

60℃まで温度を上げながらミョウバンを溶かし，結果を記録しました。班で役割を明確にして実験に取り組みました。

考察について対話しました。透明シートを活用し，予想と比べながら，物の溶け方の規則性を捉えていきました。

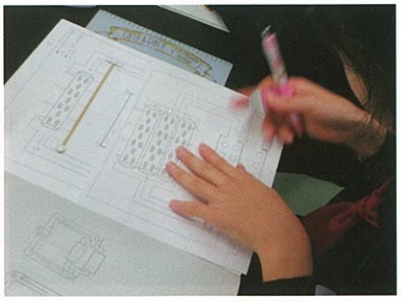
**授業討議でのご意見・ご指導**

・透明シートは子どもたちの多様な予想を表出させ，考察とつなぐのに有効であった。
・対話の目的をはっきりさせ，出た意見を観点ごとに位置づけることが必要であった。

## 理　科　第6学年「上手につくって賢く使おう　ー電気と私たちのくらしー」

濟城　智哉

本時は，「どう電熱線を使うと，目標水温を達成できるだろうか」という学習問題を設定しました。目標水温の達成には，多く発熱させることが必要です。前時までの実験結果から，「電熱線はより短い方がよい」，「より太い方がよい」，「本数を増やして並列つなぎにする方がよい」という見通しをもちました。そして子どもたちは，長さ，太さ，本数を変えた三つの方法別グループに分かれて実験を行いました。結果は，どの方法でも見事に目標水温を達成することができました。



目標水温達成の理由を電気回路シートにかかせることで，電熱線に流れる電気のイメージを多様に表出させました。

対話の前には，聴き手が最後まで話し手を意識して聴けるように，「上手な話の聞き方」を確認して，対話を促しました。

多く発熱した理由を話し合う中で，電熱線に流れる電気のイメージの共通点から，電気の働きに気付いていきました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・実験時と交流時とでグループ構成を変えたことは，交流の必要性を生むのに有効であった。
・方法別グループでの考えをまとめてから対話に向かわせた方が，より効果的だろう。

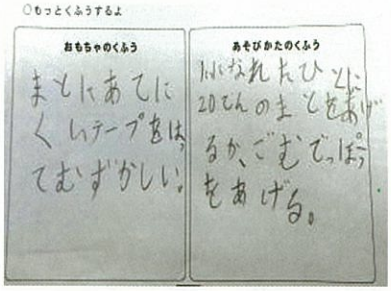
## 生活科　第1学年「昔の遊びを楽しもう」

中家（なかや）　啓吾（けいご）

さまざまな昔の遊びに親しんだ子どもたちは，お気に入りの遊びを選択して，その遊びを自分なりに工夫してきました。本時では，友達と一緒に遊ぶことを通して，互いが考えた遊びの工夫を見つけていくという学習問題を設定しました。その際，遊びの工夫を，おもちゃの工夫と遊び方の工夫の二つの観点から考えることで，多様な工夫が表出されました。遊びながら工夫を互いに紹介し感想を伝え合うことで，いろいろな工夫に気付いた子どもたちは，もっと楽しい遊びにできないかと考えていきました。

教師が子どもとペアになり，モデルを示すことで，紹介のしかたを共通理解し，対話をしやすくしました。

一緒に遊びながら，工夫の紹介を聴くことで，友達の工夫のよさに気付き，感想を伝えることができました。




友達と一緒に遊んで話したことを基に，もう一度自分の遊びの工夫を考え，ワークシートに書いていきました。

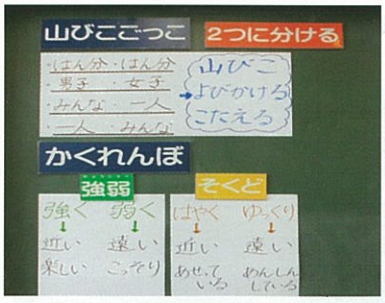
**授業討議でのご意見・ご指導**

・一つの遊びの工夫が他の遊びにも活用できることを板書に示すことで，工夫を考えやすくなっていた。
・全体対話では，自分の工夫の紹介ではなく，友達のよさを紹介させた方がより深まったのではないか。

## 音楽科　第2学年「様子を思い浮かべて歌おう　―『こぎつね』―」

溝渕（みぞぶち）　佳子（けいこ）

前時までに『こぎつね』の歌詞や曲想から情景を想像し，歌い方の工夫を考えた子どもたち。本時は，自分の思い描いた山の中の様子を基に，情景をより豊かに表すために，「山の中　山の中」と反復する部分に着目し学習問題を設定しました。自分たちの歌った「山びこごっこ」や「かくれんぼ」を聴いて，二つに分かれて歌ったり，強弱や速度を変化させて歌ったりすることで，情景を表したことを想起しました。その後，自分の思い描いた「山の中」になるよう，歌い方をさまざまに工夫していきました。




既習の学びを段階的に想起させることで，歌い方の工夫を多様にし，自分の思いを歌って表すことへとつなげました。

「しっかり聴いてくれてうれしかった」と教師の気持ちを語ることで，友達の考えを最後まで聴く雰囲気をつくりました。

友達の工夫や自分の工夫が，思い描いている様子や気持ちを表せているかどうか，みんなで歌って確かめました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・既習とつないで考えさせたことで，考えが多様になったり見通しをもって工夫したりできた。
・工夫した歌い方を友達と歌って確かめる時間が短かったので，工夫と思いのつながりが曖昧になった。

## 図画工作科　第1学年「想像を膨らませてかこう　ーうつしたかたちからー」

造田　朋子

本単元では，まず身の回りにある物の形を版にし，写した形・色から生き物を想像しました。そして本時は，自分の表したい生き物に合うように版を写す向き，並べ方，配置，写す数，色の組み合わせ等の表現方法を工夫していきました。製作した後，透明のシートを作品に重ね，自分の工夫についてことばで書き込みました。工夫に着目しながら友達と伝え合うことで，自分の考えになかった工夫に気付いたり，さらにおもしろい工夫を考え出したりしながら，思いに合った工夫を吟味していきました。

透明のシートに自分が工夫した部分を丸で囲み，工夫を短いことばで表して伝え合えるようにしました。

一人一人の工夫を「アイメッセージ」で伝えたり，「ききあいの手びき」を示したりして，対話しやすくしました。

向きを工夫していた子どもが，友達と対話することで配置の工夫も取り入れてみようと考えました。

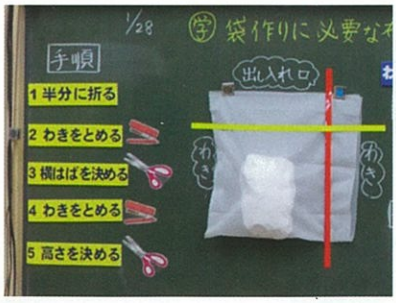
**授業討議でのご意見・ご指導**

・透明のシートに自分の表現方法の工夫を書き込むことで，視点を明確にもって対話することができた。
・製作時間とともに対話の時間を十分にとることで，さらに考えが深まっただろう。

## 家庭科　第5学年「オリジナルバッグを作ろう」

芳我　清加

子どもたちは，個々に設計した袋の製作に必要な布の大きさを見積もるため，中に入れる物を持参しました。まず，中が透けて見えるメッシュ素材の布を使い，入れる物の大きさに合わせて縦横の不要な布を裁断したり，ホッチキスで留めたりして袋を試作しました。次に，試作した袋や見本の袋を基に，ぬいしろの幅や出し入れ口の始末のしかたについて話し合い，布の大きさを見積もる際には，入れる物の大きさに，ゆとり，ぬいしろ，三つ折りの幅を加える必要があると気付いていきました。




中が透けて見える布を使った試作の際は，手順カードやガイドラインで試作の過程を視覚的に捉えられるようにしました。

持参した物を実際に包んで自分に合った袋を試行錯誤しながら作り，必要な布の大きさやぬいしろの幅を見いだしました。

「作る袋が違うから，隣の人とは違って当然だよ。」と助言し，臆さずに自分の考えを話し合える雰囲気をつくりました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・入れた物が透けて見える布は，必要な大きさを見積もったり試作したりする際に有効な教材であった。
・見本の袋を観察し，手順の見通しを十分にもたせておけばスムーズに試作ができたのではないか。

## 体育科　第2学年「ドリームランドへレッツゴー！　～表現遊び～」

山路　晃代

子どもたちは，これまでの変身遊びを通して，いろいろなものになりきって踊る楽しさを感じてきました。そこで本時は，遊園地の乗り物になりきって踊ろうと考えました。その際，速さを変える，上下に動く等のこれまでに見つけた動きのひみつを使うと，楽しく踊れることに気付きました。そして，同じ乗り物を選んだ者どうしで，もっとなりきって楽しく踊るためのよい動きを見つけて伝え合いながら，それらを自分たちの動きに取り入れていきました。

いろいろな形や大きさの紙飛行機を飛ばし，まねして踊ることで，これまでとは違う動きのひみつを見つけました。

自分たちで見つけた「ふわっとことば」を使うことで，進んで動きのよさを伝え合うことができました。

自分たちの乗り物の動きに，見つけてきた動きのひみつを選んで取り入れることで，さらに楽しく踊る姿が見られました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・紙飛行機の形や飛ばし方で飛び方が変化するので，動きのバリエーションが広がる教材であった。
・よい動きを見つけるために，もっと早い段階で対話の時間を設定した方がよいかもしれない。

## 体育科　第4学年「みんなで目指せタッチダウン！　～フラッグフットボール～」

山本　健太

さまざまな作戦を使ってゲームを行ってきた子どもたちは，得意な作戦を繰り返しているだけでは得点が伸びないという課題をもちました。そこで，「状況に応じて，どの作戦を選んで攻撃すればいいか考えよう」という学習問題を設定しました。まず，作戦ボードを用いて，各自が選んだそれぞれの作戦の有効性を話し合い，作戦選択の根拠となる考えを共有していきました。そして，話し合ったことを基に，状況に応じた作戦を選んで攻撃し，得点することができました。

パス作戦やラン作戦の成功数や最高獲得距離を手がかりに，どの作戦が有効か作戦ボードを用いて考えていきました。

「司会のシナリオ」「フォロワーの約束」を想起・活用させることで，互いの考えを共感的に聴き合えるようにしました。

スタート位置や点差等の状況に応じて，各チームが有効だと考える作戦を選択して攻撃することができました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・パスとランの作戦を色分けした作戦ボードを用いることで，個々の考えが多様に表出されていた。
・作戦カードの種類の多さが，子どもたちの混乱を招いていたかもしれない。

## 体育科（保健）　第5学年「身の回りで起こるけがを防ごう」

渡辺　博美（わたなべ　ひろみ）

学校でたくさんのけがが起こっていることを知った子どもたちは，安全で楽しい学校にするために，けがを減らそうと考えました。そこで本時は，学校で最も多い，運動場でのけがをどうすれば防げるのかを考えていきました。まず，運動場のイラストを基に，人の行動と周りの環境からけがが起こる原因を考え，そこからけがを防ぐための方法を考えました。そして，それぞれの考えを出し合いながら話し合い，けがを防ぐためにはどのように行動するとよいかを捉えていきました。

ワークシートを用いて，人の行動と周りの環境の両面からけがを防ぐ方法を考えられるようにしました。

教師が「ポジティブ・ストローク」を用いた対話のデモンストレーションを行い，話しやすい雰囲気をつくりました。

けがを防ぐ方法を付箋で出し合いながら考えを広げ，自分が気付かなかった危険や防ぐ手だてに気付いていきました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・教師が「ポジティブ・ストローク」を常に行っており，教師の聴く姿勢が子どもの手本となっていた。
・けがを防ぐ手だてを考えていく際，子どもを揺さぶる教師の発問がもっと必要だったのではないか。

## 道徳の時間　第2学年「友達っていいな　―『ないた赤おに』―」

山路　晃代（やまじ　あきよ）

資料を読む前に，学級内には友達に対する考えがさまざまにあることを明らかにしました。その後，資料を読み終えた子どもたちは，友達を思う青鬼の行動やことばに着目して，赤鬼の気持ちを考えていきました。さらに，赤鬼が村人と仲よくなった時の青鬼への「ありがとう」の気持ちと，手紙を読んだ時の青鬼への「ごめんね」の気持ちを表出させ，それぞれの続きのことばとその理由を話し合わせ，友情，信頼の価値に迫っていけるようにました。

してくれてうれしかったこれまでの経験を，写真と吹き出しで想起させ，赤鬼の気持ちを捉えられるようにしました。

「ありがとう」（黄）と「ごめんね」（緑）のどちらの気持ちが強いか「ハートカード」の色で表しました。

胸に着けた互いの「ハートカード」を見ながら考えを伝え合うことで，友情，信頼の価値に迫っていきました。

**授業討議でのご意見・ご指導**

・対話の前に資料と自分のこれまでの経験をつなぐことで，赤鬼の気持ちに迫ることができた。
・「ハートカード」の色が似ている者どうしで交流すれば，価値へ別の迫り方ができるのではないか。

# 全体講演

## 大友　秀人　先生

### 「対話のある授業づくり　～授業に生かす育てるカウンセリング～」

**1　対話のある授業とは**

教師が子どもたちに接する時間で一番長いのは授業時間です。その時間を生き生きとしたものにするためには，分かりやすく（子どもの側の分からなさを共有し，授業の構成，教材の精選をする）おもしろく（おやっと子どもが思い，わくわくする），ためになる（なるほどと子どもがうなずき，納得する）対話のある授業にすることです。対話とは異なる価値観等をすり合わせることによってお互いが変わり，新しい第３の価値観をつくり上げることです。授業の中で，私はどう感じたかというアイメッセージを伝え合うことが対話のある授業の大切なポイントになります。参加者が体験したことを分かち合うことにより，行動，思考，感情が修正，拡大されていくのです。

**2　育てるカウンセリングとは**

構成的グループエンカウンターやソーシャルスキルトレーニング等の活動を通して，個人の心理的援助や成長を援助しようとする方法の一つに育てるカウンセリングがあります。活動の終わりには，感じたこと等を振り返り，お互いに伝え合い，共有し合って分かち合うシェアリングがあります。自分の考えを述べながら，まず相手の考えを受容し，次にお互いの考えを高め合い，最後に考えを統合していきます。このような段階的シェアリングのプロセスにおいて人格的成長が促されていきます。

# 分科会講演

## 大友　秀人　先生　「育てるカウンセリングを生かした対話のある授業づくりについて（演習形式）」

初対面の二人組で「うし・うまじゃんけん」を行い，和やかな雰囲気の中で演習が始まりました。その後，昔話『一寸法師』を題材に疑問点を出し合ったり，お話に出てくる「針」や「打ち出の小槌」の意味について話し合ったりしました。

このような，対話が生まれる瞬間の体験は，対話のある授業づくりに生かされることでしょう。

## 国　水戸部　修治　先生　「国語科の学習指導について」

### 1　教育課程改訂の方向性　－「教育課程企画特別部会　論点整理」(H27.8.26) より－

非常に急速に変化している社会の中で，子どもたちは，基礎・基本的な知識や技能を着実に獲得しつつ，それらを社会のさまざまな場面で活用できる知識・技能として体系化しながら身につけていくことが重要になってきます。協働的問題解決のために必要な思考力・判断力・表現力等を育てながら，どのように社会や世界と関わり，よりよい人生を送るかという点が，次の教育課程に向けて重要視されていきます。そのために，「習得・活用・探究という学習プロセスの中での，問題発見・解決を念頭に置いた深い学び」「他者との協働や外界との相互作用を通じて，自らの考えを広げ深める，対話的な学び」「子どもたちが見通しをもって粘り強く取り組み，自らの学習活動を振り返って次につなげる，主体的な学び」という三つの学びの過程が実現できているかどうかが大切になります。

### 2　国語科としての授業づくりの方向性

育成したい国語の資質・能力を明確にした上で，言語活動を適切に位置づけ，子どもにとって目的性や必然性のある学習となるように工夫することが，今後ますます重要になります。「自分を探す」「友達のよさを見つける」「新たな意味を見いだす読みに高める」といったことを重視し，一人一人が課題意識をもって交流に臨めるようにする必要があります。一人一人の感じ方の違いや，そのおもしろさに気付く指導，自分の考えをまとめる指導を大切にすることが，対話的な学びの実現に向かう手だての一つとなるのです。

## 社　伊藤　裕康　先生　「社会科の学習指導について」

### 1　社会科の不易

社会科が必要な理由を考える際，シベリヤ抑留体験に基づき戦前の教育の反省のもとに子どもの自主的価値判断をつけることが大切だという学部時代に受けた講義が鮮明に残っています。また，民俗学者の柳田國男氏は，「社会科とは，賢く正しい選挙民となるにはどうすればよいかとも表現すべき大きな問題解決学習だと言える」と述べています。要は，よい選挙民をつくる教科だということです。だから，社会科は騙されない，多面的・多角的にものを見る力が必要なのです。

### 2　社会科の流行

今後は，子どもが，共通の事実を意味づけたり価値づけたりしてできた自分の価値観をぶつけ合い，すり合わせていく対話のある授業が求められるでしょう。そのために，教師に必要なことが二つあります。一つは，子どもが子どもなりにこれまでの生活の中で組み立ててきた論理をどう活用するかを考えておくことです。もう一つは，習得が先で探求が後という流れに加えて，探求から始まり，必要に迫られ習得を行うという学びの流れの可能性を探ることです。現実社会は，習得してなくても仕事を任せられることがあります。

### 3　社会科におけるESD（持続可能な開発のための教育）

次の学習指導要領では，時間軸を伸ばして将来の世代のことまで考えるESDが現行学習指導要領以上に求められます。その実践のためには，「私たちと次の世代の命と暮らしの持続可能性を妨げる課題にどんなものがあるか」ということを考えていくのがよいでしょう。

## 道　七條　正典　先生　「『特別の教科　道徳』の学習指導について」

### 1　道徳教育推進教師の役割

道徳の授業を充実させるためには，道徳教育推進教師を中心とした全校的な体制づくりが求められています。特に，道徳教育推進教師の役割として，「機能的役割」について考えておく必要があります。その第１は，道徳と他の教育活動，学校と家庭や地域等をつなぐコーディネーターとしての役割。第２は，重点目標を設定し，実効性のある全体計画や年間指導計画を作成したり，研修等における全教師による協議・検討の際の議論の活性化や充実を促したりするファシリテーターとしての役割。第３は，教材の活用やその指導の在り方等について，個々の教師に対して適切な支援や指導を行うアドバイザーとしての役割です。

### 2　心に響く魅力ある道徳授業の工夫

#### （１）主体的・意欲的な学習のために

教材の開発や活用というのが非常に重要であると思います。一人一人の子どもが学ぶ道徳的価値について興味関心をもち，主体的・意欲的に学習に取り組めるようにしていくことです。自分との関わりにおいて学ぶという教材の開発のしかたも考えられます。

#### （２）学び合い深め合う学習のために

自らの見方・考え方をもち，他者と交流することで，道徳的価値についての考え方を深めていくためには，教師が話し合う素材をしっかりと浮き彫りにして，どういう風にそれを整理していくのかを想定しておくことが大切です。そのような想定により，多面的・多角的な視点による話し合いや討論が可能になります。

## 特　坂井　聡　先生　「特別支援教育の視点を生かした学習指導について」

### 1　障がいとは何か

ミス・アメリカコンテストの代表者や陸上選手等，世の中では障がいのある人たちの活躍が増えてきています。大学入試センター試験でも配慮を求める人が増え，問題の拡大提示等，障がいのある人への支援も増えてきているということが言えます。

障がいとは参加できないことや活動できないことです。誰でも経験するものなのです。また，周囲がつくりだすものでもあります。車いすの方にとっては段差がなければ障がいはないのです。教師の知識や理解がなければ，教師自身が障がいになってしまう可能性もあります。発達障がいのある子どもたちは，コミュニケーションと社会性とイマジネーションの三つの障がいを抱えています。それを克服するためには教師自身がコミュニケーション能力を高めなければなりません。

### 2　障がいのある子どもにどうかかわるか

まずは子どものことを理解することが大切です。そして，子どもの様子を見ながら，指示を分けて伝えるようにしたり，黒板に見えるように示したりする等，その子に合った支援が必要です。また，子どもが自分の思いを伝えられるように感情アプリ等を使うことも有効でしょう。

先生方がしなければならないのは，本人の力を伸ばすこと，支援を考えること，周りの理解を得ることです。少し視点を変えるだけで先生方も楽になるはずです。クラスの誰もが，生まれてきてよかったと思える学級経営をぜひしていただきたいです。

# 全体授業

## 社会科

第６学年　「安住の地を求めて　ー難民問題を通して見える世界と日本の役割ー」　渡部（わたなべ）　岳史（たけし）

増え続ける難民に対し，国連や民間企業がさまざまな支援を行ってきたことを学習した子どもたち。本時は，日本が難民に対して，前年の３倍以上の資金援助を行うことから「なぜ，そんなに多額の…」という問いをもち，追究しました。まず，その是非について，増額派と同額・減額派で対話を行いました。その中で資金援助が難民のためだけでないことに気付いていきました。その後，この日本の行為に対する外国の評価を話し合い，世界の人々が共に生きていくための日本の役割を捉えていきました。

資金援助増額の是非という対話の軸を明確にし，自分の立場をはっきりさせて話し合えるようにしました。

班で話し合った対話のルールを想起させ，自分の考えを伝えたり，相手の考えを聴いたりしやすくしました。

自分が選んだ国の国旗を持たせ，その国の立場から，日本の資金援助増額に対する意見を伝え合えるようにしました。

# シンポジウム

## 対話を通した「思考力」の育成

研究会の最後を締めくくったシンポジウムでは，全体授業を基に「対話を通した『思考力』の育成」について話し合われました。

### どのように対話するのかを明確に

子どもたちが自然につぶやいたり，グループで話し合ったりできていました。さらに，デモンストレーション等によって対話の方法を子どもたちに浸透させることで，対話を深めていくことができるのではないでしょうか。

【大友先生】

### 対話のよさを実感させる

学習問題は，ねらいに直結したものであり，子どもにとって必然性や必要性，目的性があることが大切です。本時は子どもたちが対話をし，答えが一つではない問いに挑戦しました。そのよさを子どもがメタ認知できたら，よりよいでしょう。

【水戸部先生】

### 対話する必然性のある問いを

教師の意図する「思考力育成（目的）のための対話（手段）」には，それをつなぐ子ども側の問いが不可欠です。「なぜ難民か」という必然性の裏付けは，問いによって保証され，それが対話の真剣味やより深い自問自答につながるからです。

【山内先生】

学習問題の設定や，対話と「思考力」とのつながりについて，具体例を挙げながら意見を交わしていただきました。また，今後の研究の方向性についても貴重なご意見をいただきました。

# 次年度研究に向けて

## 本年度の研究発表会でいただいたご意見

対話を通して「思考力」を育成するというテーマは，今求められている「アクティブ・ラーニング」にもつながると思う。

個々の考えから，知りたい聞きたい調べてみたいという感情を生むことが，意欲的に探究していく力になるのではないか。

対話は必要であるが，対話のみが目的になってはいけない。どのように思考させるのかが大切であると改めて感じた。

「育てるカウンセリング」を生かした学級づくり，授業づくりはとても大切だと感じた。教科研究は，その上に成り立つものだと思う。

## 次年度研究の方向性

★「思考力」の育成を目指して，子ども一人一人の学習意欲を育て，持続させる有効な働きかけを見いだす。

★個々がもつ「問い」を大切にし，その解決に向けて互いの考えを関わらせ，高め合う授業づくりを行う。

## あとがき

教頭　藪内（やぶうち）　雅昭（まさあき）

本年度は，「対話を通した『思考力』の育成」の２年次研究として，多様な考えが表出されるために教材や授業構成を工夫し，対話が促進されるために「育てるカウンセリング」を手がかりとして研究を進めて参りました。寒さ厳しい折，また２日目は雨も降る中，県内外の関係諸機関から多くの方にご参会いただき，さまざまな立場から貴重なご意見をいただけたこと，職員一同感謝しております。

平成28年度は，次期学習指導要領に向けて中央教育審議会の教育課程部会より答申が出される予定であり，本校でもその方向性を注視しつつ，「思考力」の育成を基点に提案，発信できればと考えています。今後とも，ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。


**編集委員**

西岡由都　白川章弘
清水顕人　中家啓吾
尼子智悠　山本健太

平成２８年３月１８日
香川大学教育学部附属坂出小学校
TEL　0877-46-2692　FAX　0877-46-5218
E-mail　sakaide@ed.kagawa-u.ac.jp
URL　http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~sakasho/